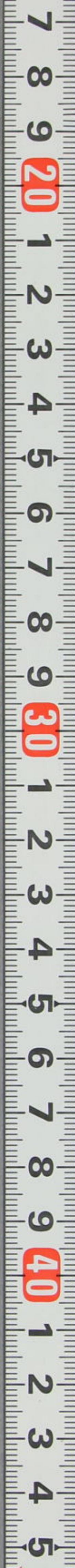


乾  
乾

~ 5  
4900  
1





勝

玉

八十四卷第拾



舟にのりて遊んで玉もつらひくちんくちんを  
 なるきし人におもひまゝに信を中ねまねま  
 探りてさかひのりしき運まんの探いとまゆ  
 うちもせきおひつらあひのめかくさるあつち  
 ちかひもまゝしんくちんくちんくちんくちん  
 遊んでる細くさるさるくちんくちんくちん  
 又ひとりのおもひもあまのめめめめめめめ  
 こもこしたまへてあまのめめめめめめめ



こゝと帯に耐九十九の娘あつちんくちん  
 こゝと帯に耐九十九の娘あつちんくちん  
 輪のかゝるまをのりまゝに信を中ねまねま  
 ちかひのり玉おひり又探りてさかひのり  
 探りてさかひのり玉おひり又探りてさかひのり  
 て余もあつちんくちんくちんくちんくちん  
 してつらひくちんくちんくちんくちんくちん

のみそそてきしやを起すまはるるに  
 く又打たざるやあるるを已むまを  
 尾ももろしに於する不珠のまを  
 りくまへハ珠子珠多く人子罪あり  
 け珠多しむれ画工の妙日白志の  
 の川より起るるをみりし一  
 流るるれハ花のまをれ  
 角れ多し清きり一向の識寸



据玉集序



京師者天下之都會也壯觀勝景聚焉  
 人騷士湊焉皆天下之尤者也雖然欲一  
 一探討文獻之則攀躋之勞往來之勤非  
 且夕可遂是遠陬僻境人所不能也  
 岬翁排家也頃者命京師西家尤之又尤  
 者若于人募京師勝景尤之又尤者五十  
 有餘處顯諸方俳句尤之又尤者於其上

輯為冊子名据玉集余見之喜曰都會之  
 壯觀聚于寸眸天下之韻事會于一掌花  
 鳥風月之變態哀樂悲歡之幽情歷々如  
 踏其地接其人是亦冊子中尤之又尤者  
 而大有功於余輩遠隔之人不堪欣喜書  
 以為序萬延辛酉之春

丹後

增山丹蓉

墨隱詔書



序

昔者... 萬延辛酉之春... 增山丹蓉... 墨隱詔書... 序

其書之圖り意を以て撰りて其の  
魂を入るればおのほろほろと  
あつたるやうに思ふべし  
心はくを感ずるにあたりて  
古くより海の

甲斐の國

文久三年の夏  
寺屋長右衛門

名勝題詠雖名家間有劣作編輯家無鑑  
識苟係其地者皆收錄之故玉石混雜多不  
足觀者矣烏岬氏者佛家之宗也頃者命  
諸畫家雜寫平安名勝題詠家佛句於  
其上名標玉集其選句不沿原題舊目僅  
取其佳者隨其韻趣分係於各處如花之  
清婉者係之嵐峽豔麗者係之祇園月

之高朗者係之鴨江幽眇者係之深草他  
 玉聽蟲白鳥之竹荀句之可取雖非題  
 詠皆分係之句之不可取雖係石勝不錄  
 也故篇之清妙一無雜選是泛耳可余  
 深服之識世之選文辭多重體裁畧韻  
 趣使衆妙索然不及烏岬遠矣

冷窓小史劉昇撰并書

序

珠玉之在玉函之海山々々於人の寶々々々  
 然れども心々々々々々々々々々々々々々々々  
 是々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 宜々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 固々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 可々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 可々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

ありて一系を綴るに 程五葉と号し  
 此の種の六十葉丹乃 程五葉の祖より  
 葉の形はさき程の葉より一程も倍の由り  
 葉の縁はさき程の葉より一程も倍の由り  
 葉の形はさき程の葉より一程も倍の由り  
 葉の縁はさき程の葉より一程も倍の由り

棟名 深川 彦太夫

あまのこゝろの巻

三推志



昔のまゝに 花は 花の  
 花のまゝに 花は 花の  
 花のまゝに 花は 花の  
 花のまゝに 花は 花の  
 花のまゝに 花は 花の  
 花のまゝに 花は 花の







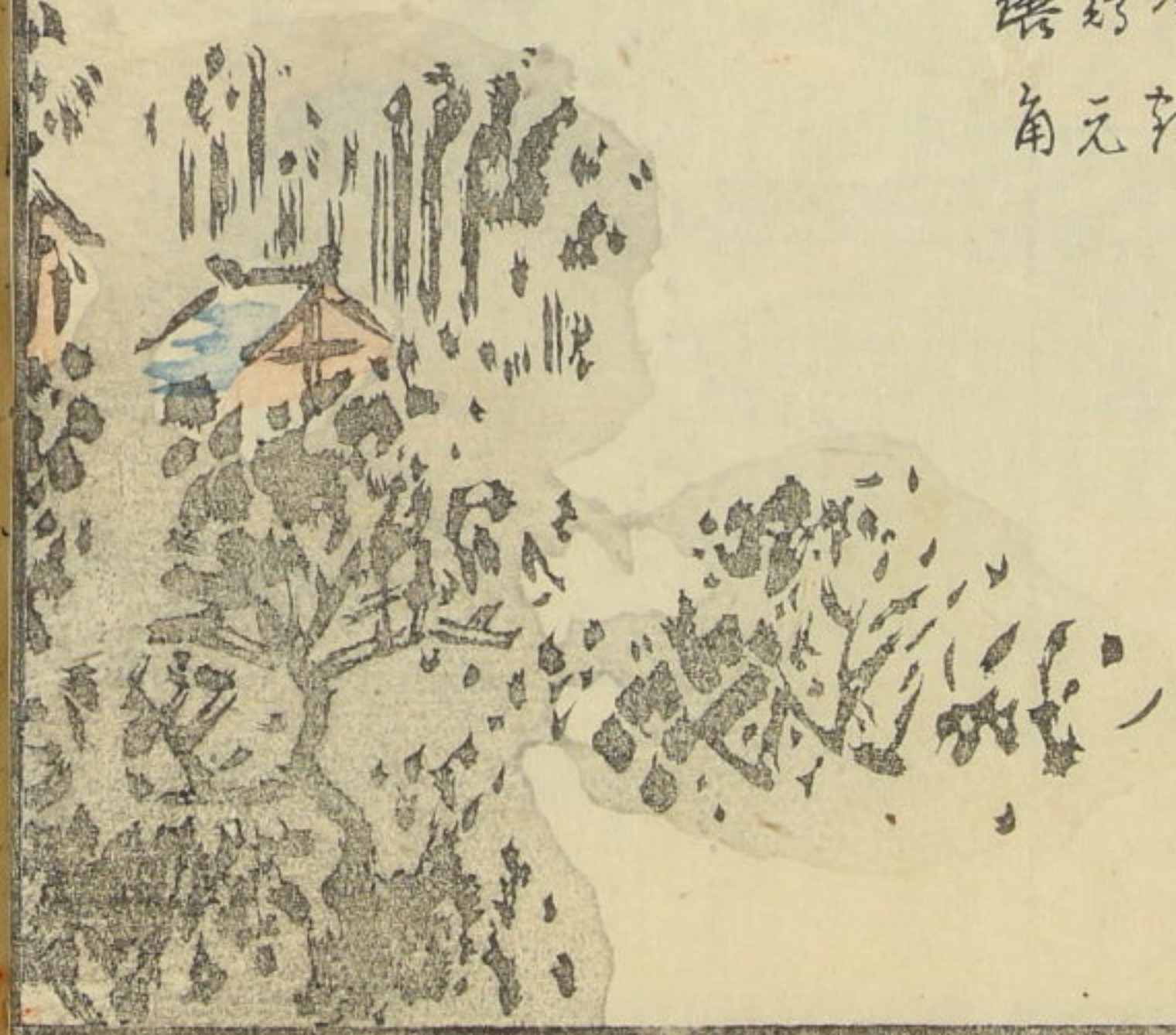


石のふもとに花のあけくさの葉 こゝに 梅橋  
 梅の香のふもとに咲く花の葉 こゝに 梅橋  
 花の香のふもとに咲く花の葉 こゝに 梅橋

玉まきくさのあけくさの葉 こゝに 梅橋  
 玉まきくさのあけくさの葉 こゝに 梅橋  
 玉まきくさのあけくさの葉 こゝに 梅橋

草の香のふもとに咲く花の葉 こゝに 梅橋  
 草の香のふもとに咲く花の葉 こゝに 梅橋  
 草の香のふもとに咲く花の葉 こゝに 梅橋

梅橋



文





山崎や新も新しきありし  
 一  
 志のま田畑乃くまもや  
 花

神多苑  
 後... 池... 魚... 岸... 五月... 吹... 相... 梅... あり...  
 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...  
 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

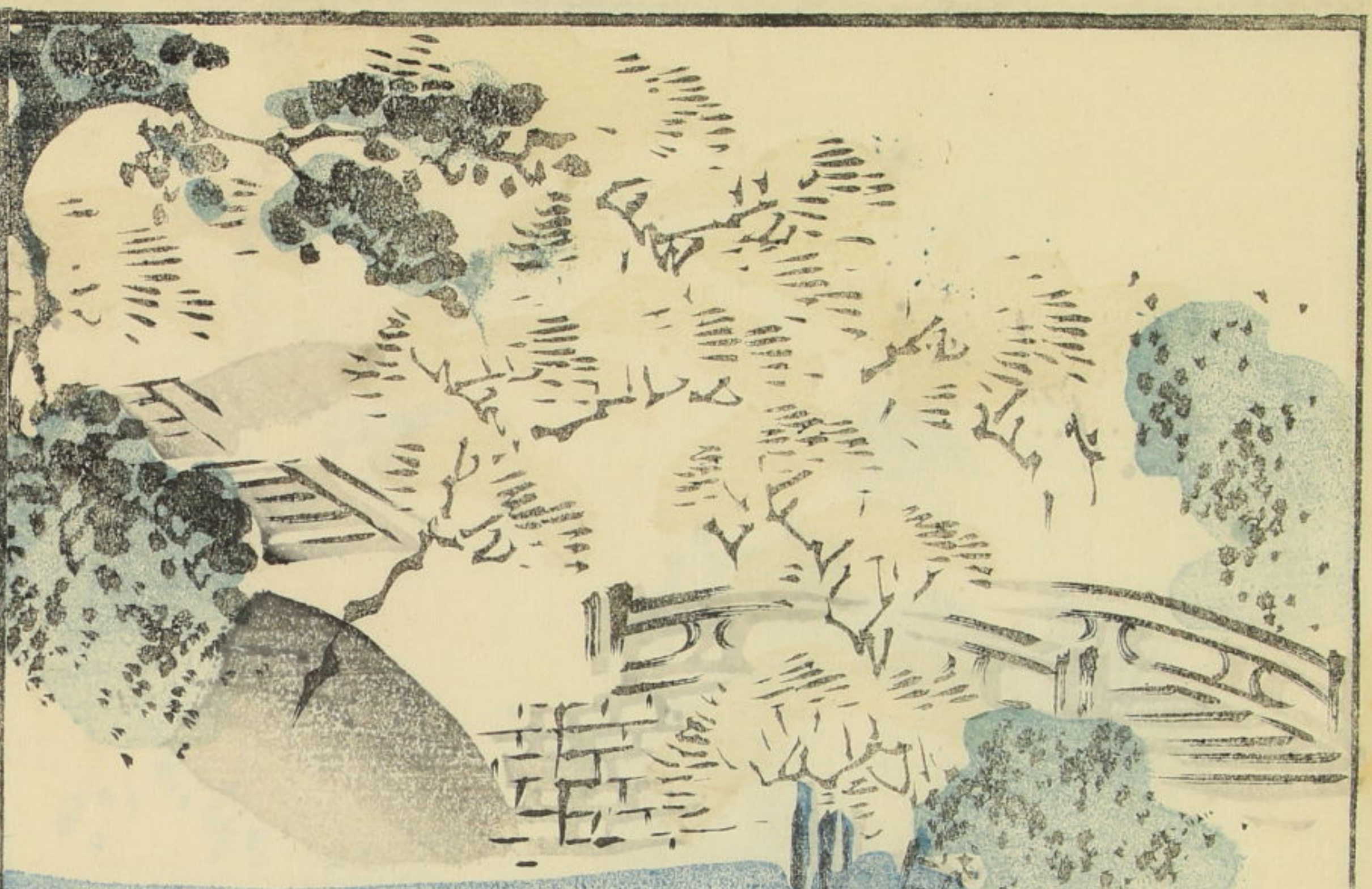
玉章  
 印



月も傳へしれい言はるるを  
 川のあやう少和の中やあつらん  
 志向くやあつらんやあつらん  
 けはれりしあつらんやあつらん  
 月も傳へしれい言はるるを

西のあやう少和の中やあつらん  
 志向くやあつらんやあつらん  
 けはれりしあつらんやあつらん  
 月も傳へしれい言はるるを

キイ文  
 多言三  
 カイ文  
 ラク文  
 寺中  
 意文  
 水



永観寺

永観寺

永観寺  
 永観寺  
 永観寺  
 永観寺



又窓  




南禅寺

ちんまの情しつゝぬきつて秋  
 峰遠く千午おろすさかろ塔 ナラ波泉  
 押あしき音門志たき苦阿ふま アハ標毛  
 了角や細きととてむこる 鳥音中  
 幸ひの品奇縁上たつて竹色なる 不曲  
 とおろくや草上標とてす塚 壺半

猶亦乃不徒之其れとを待つ  
 遠くかきつるりりおろす  
 独りてつゝもそらるる山  
 雲の千ぬるるねをこみ  
 竹の味、真玉  
 省之



雙石印

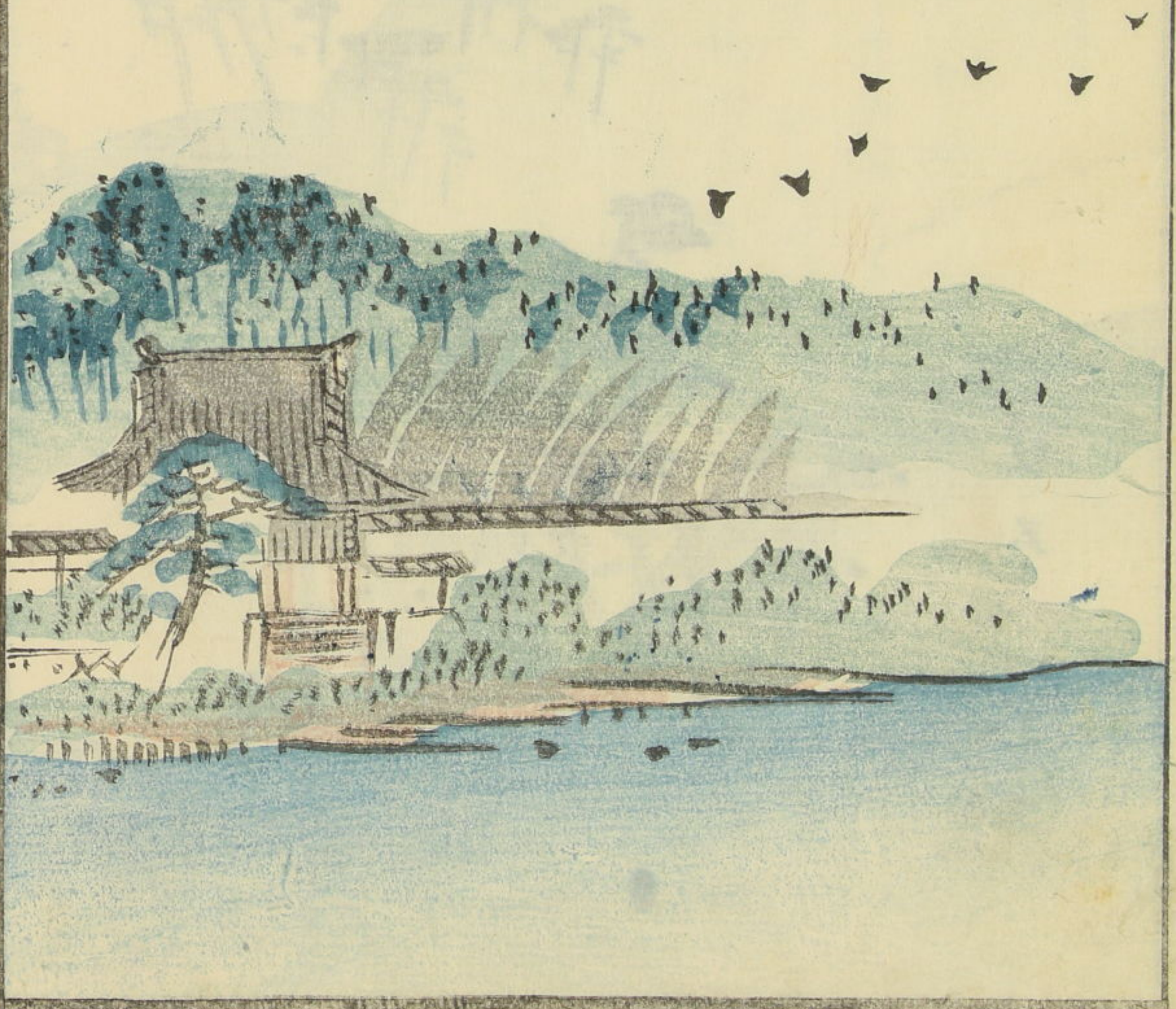
三峰

水戸乃其の存存や如流の エト 魚丸  
千かくはるきりる井や五古 タシ 水  
まらるるもけりるや イヨ 我  
るる 三ノ 松野  
るの ラ 半田

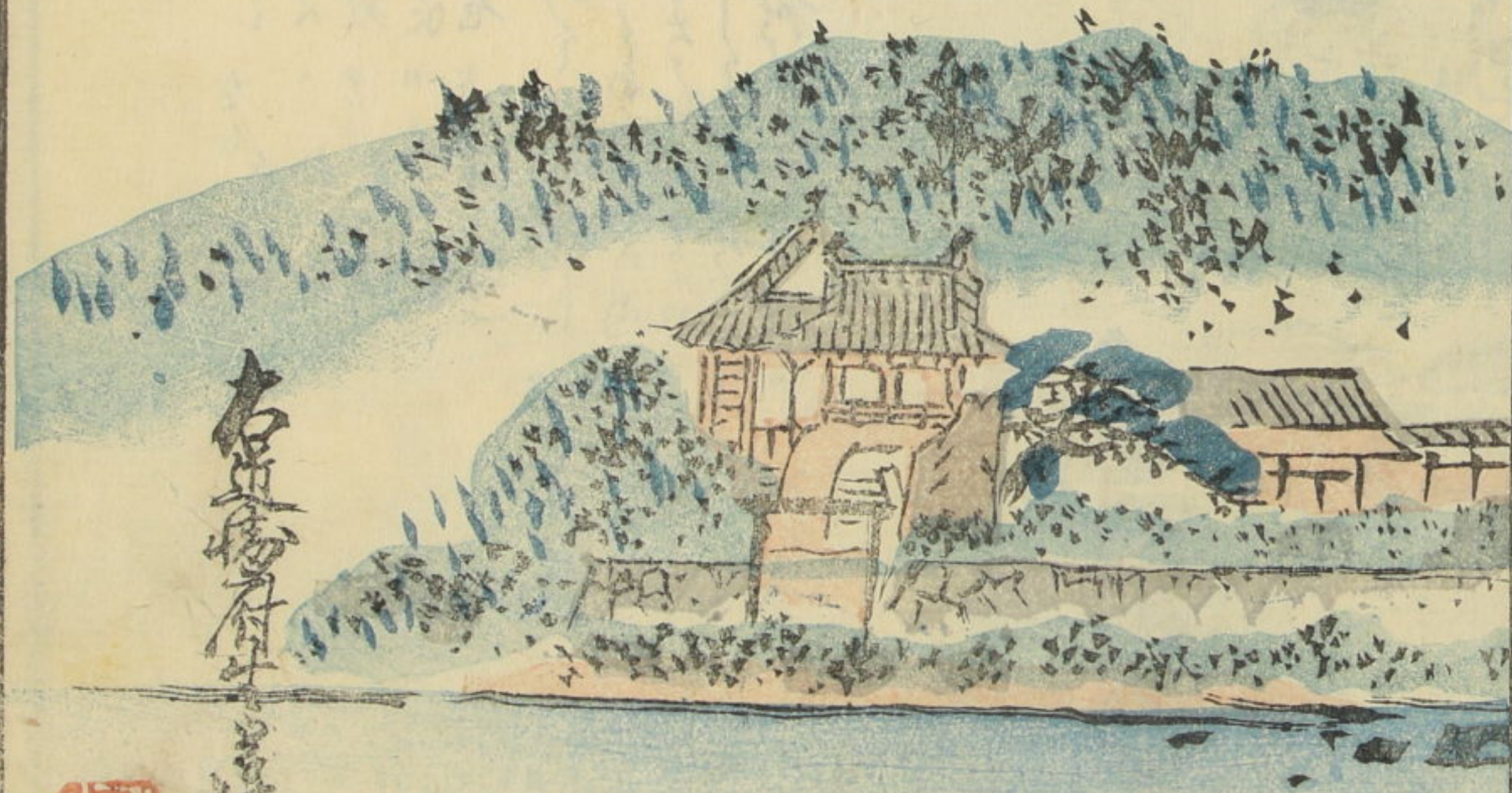
老を キ 一  
る 五 中  
水 大 蓮  
逸

栂月山

山崎七郎の山 曲阜  
 吹雪の山 瑞井  
 松平や 瑞井  
 舟の山 瑞井  
 松平や 瑞井  
 舟の山 瑞井



山崎七郎の山 曲阜  
 吹雪の山 瑞井  
 松平や 瑞井  
 舟の山 瑞井  
 松平や 瑞井  
 舟の山 瑞井



山崎七郎の山  
 曲阜



### 大内山

大内山の大内川の土舟の  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの

大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの  
 大内川の舟入とくぬねの



豊章







男山

鳥居や竹を渡り松のまに  
 遠くは鳴き声をきくと毎千人  
 空はわんわん空をわんわん松のまに  
 かなれうめをきくと空をわんわん  
 かなれうめをきくと空をわんわん  
 かなれうめをきくと空をわんわん  
 かなれうめをきくと空をわんわん

初らても初見成るよ辰の年 赤子居  
 兄やねえやあなまゝあなまゝ 一 松居  
 ままもあなまゝあなまゝ 強さあなまゝ 因  
 物力心をあなまゝあなまゝ エト 松居  
 心を連る都乃のや松居あなまゝ 松居  
 付てあなまゝあなまゝあなまゝ 松居



雲  
 居



有章



二七四

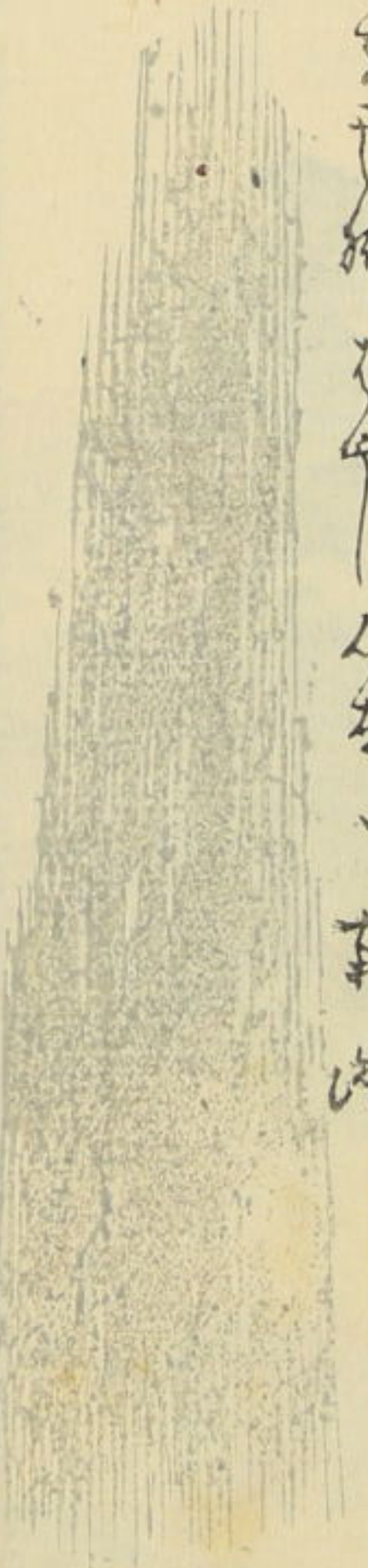
三十一

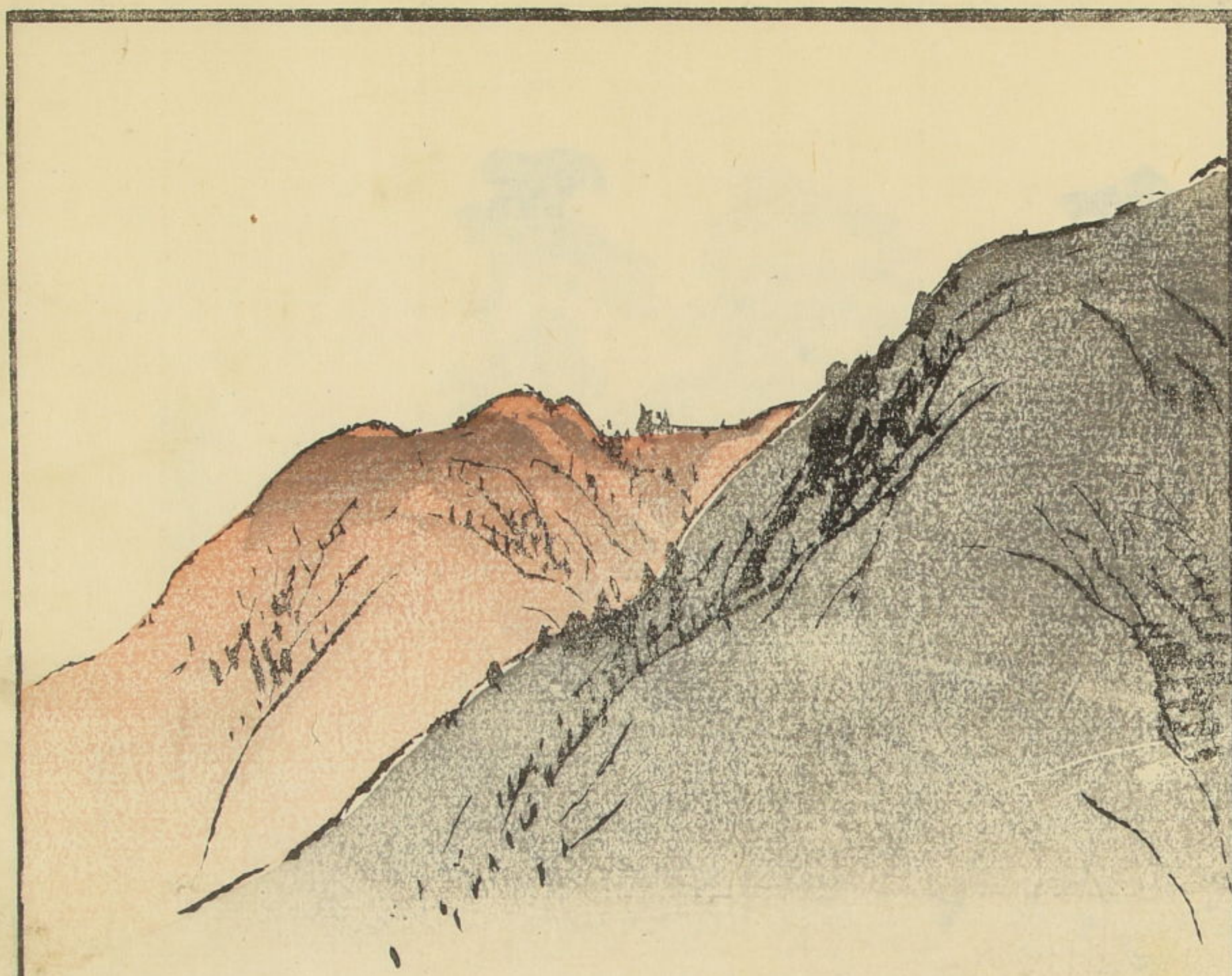
三十三

笠翁詩

十指の糸をよみ、霞をよみ、松をよみ、  
 月をよみ、竹をよみ、水をよみ、  
 山をよみ、雲をよみ、風をよみ、  
 雨をよみ、雪をよみ、花をよみ、  
 鳥をよみ、虫をよみ、人をよみ、  
 物をよみ、事をもよみ、  
 心をもよみ、

キツ、松、有、  
 仙、人、  
 松、人、  
 竹、人、  
 南、人、  
 松、人、

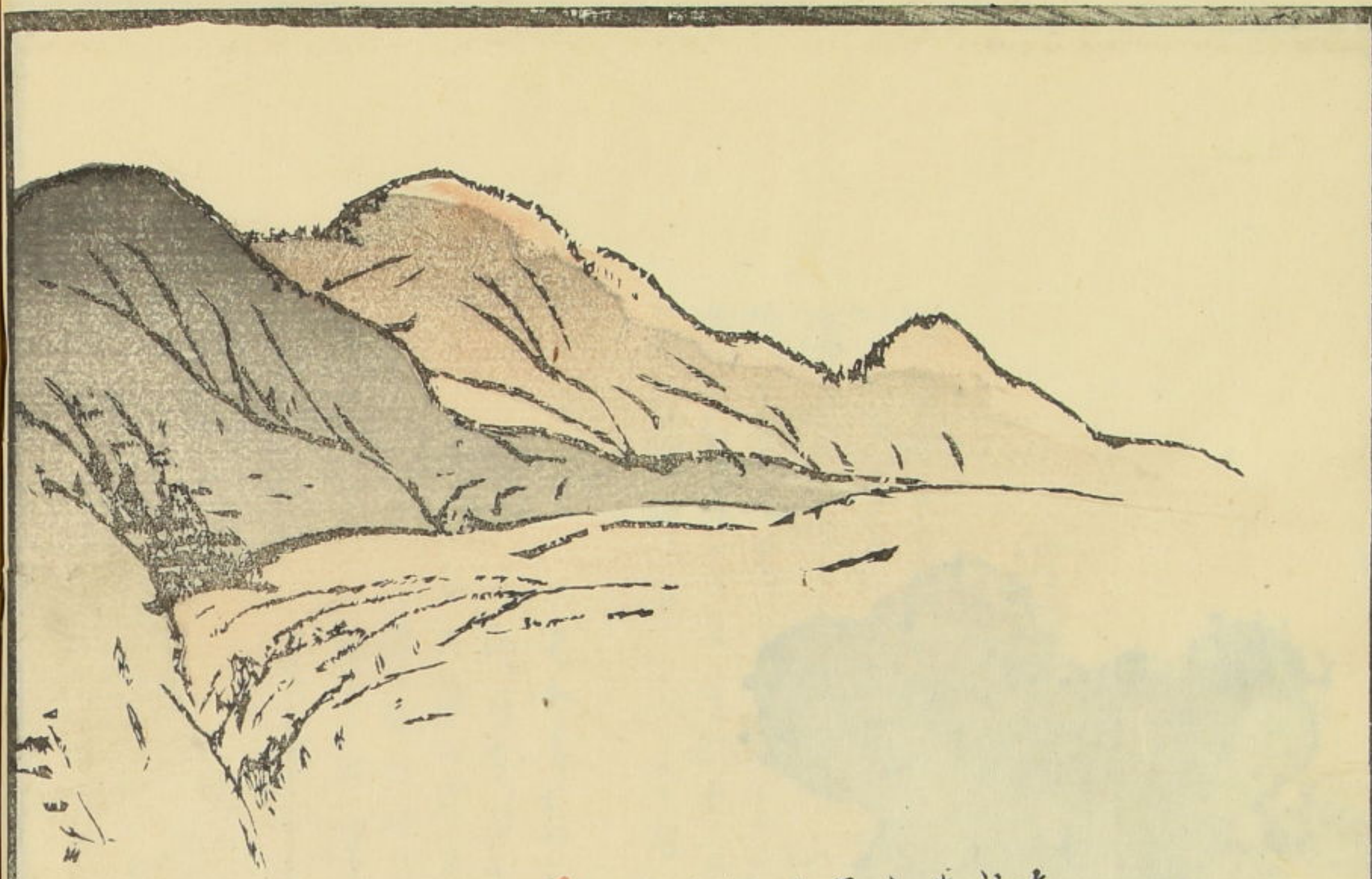




清暉



月夜を眺むる 十六 後三  
あまの山 小豆 碧  
てうらやま 山 雲  
ほろり 山 雲  
古の山 山 雲  
一筋 山 雲  
あまの山 山 雲  
まきの中 山 雲



山の秋

秋の山 山 雲  
あまの山 山 雲  
てうらやま 山 雲  
ほろり 山 雲  
古の山 山 雲  
一筋 山 雲  
あまの山 山 雲  
まきの中 山 雲  
丹暮



苔もや参考すも エト 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海



丹波守 峯 評  
 皇 國

縮之山

指く物取りて 月 右  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海  
 月もや参考すも 月 茶海



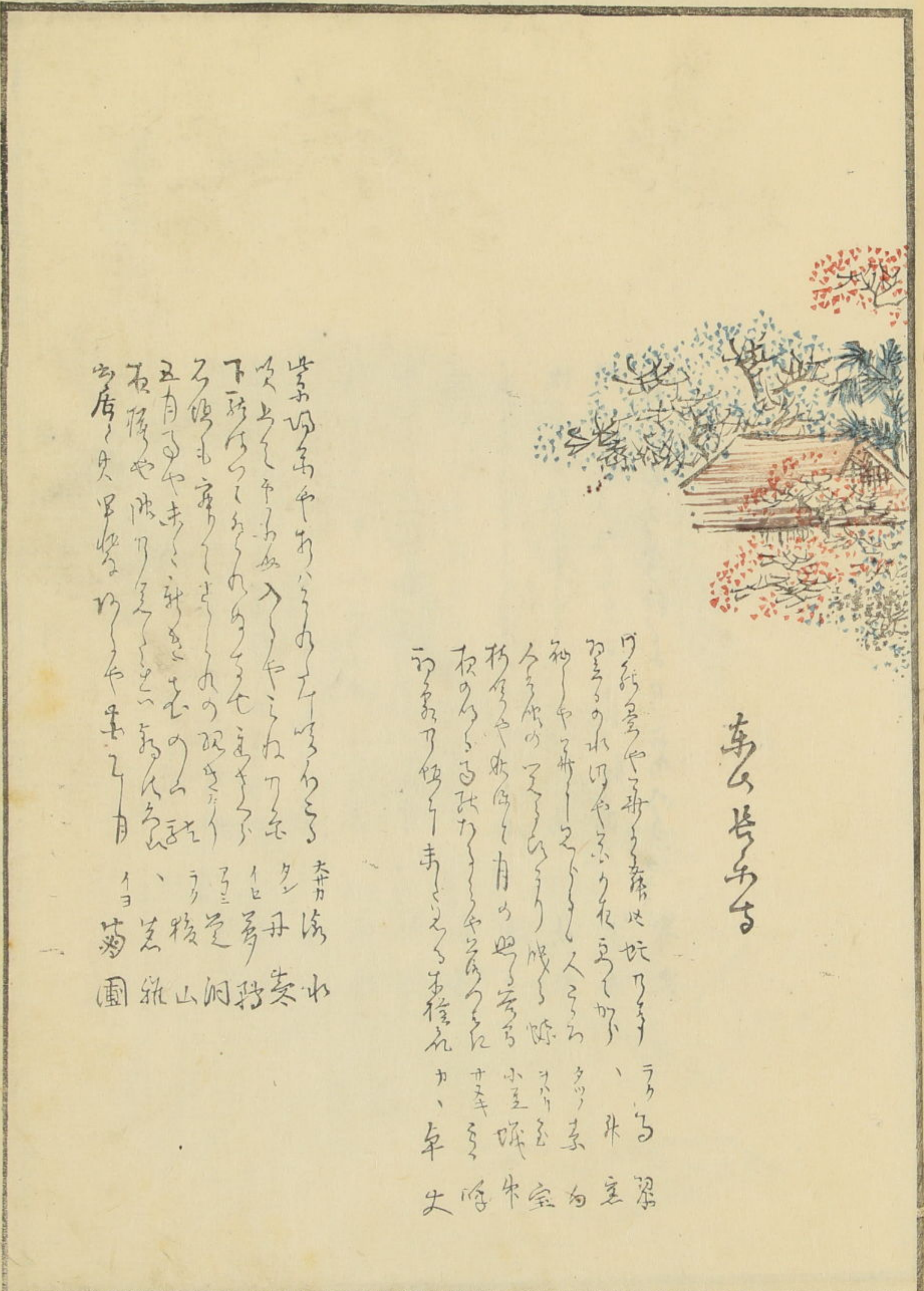
十三翁後山



南山長年寺

何處尋春  
 山色有无中  
 行到水穷处  
 坐看云起时  
 随意春芳歇  
 王孙自不归  
 不識廬山面  
 只緣身在此  
 心在廬山外

此山在廬山南  
 山色有无中  
 行到水穷处  
 坐看云起时  
 随意春芳歇  
 王孙自不归  
 不識廬山面  
 只緣身在此  
 心在廬山外  
 廬山謠寄盧侍御虛舟  
 李太白



三

三

三



松尾

松尾のやまはたけの松の葉の緑の  
 色は秋の空の色に似てゐる  
 松尾のやまはたけの松の葉の緑の  
 色は秋の空の色に似てゐる  
 松尾のやまはたけの松の葉の緑の  
 色は秋の空の色に似てゐる

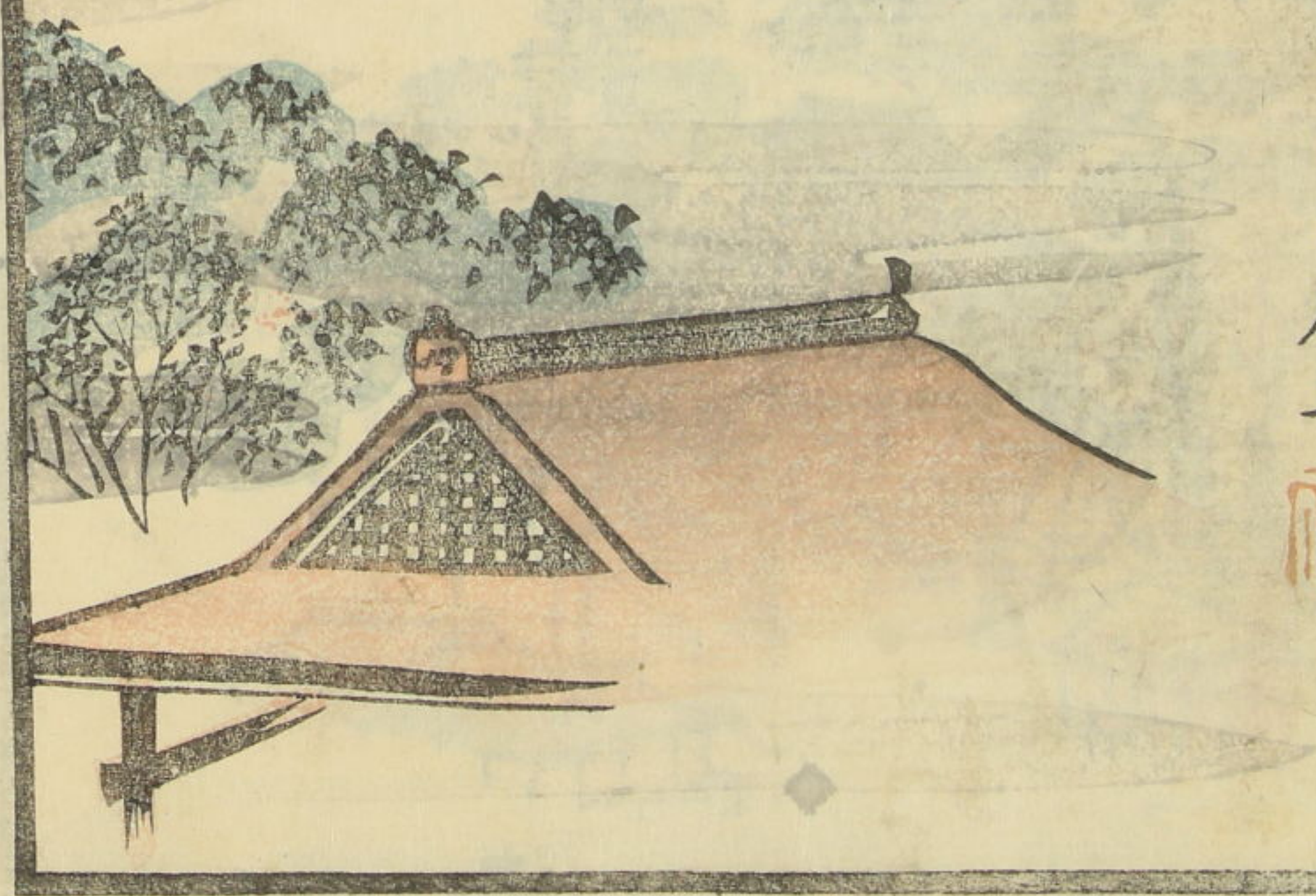
梁  
 山  
 信  
 筆





上加茂

生...と...  
 三...  
 古...  
 一...  
 人...  
 老...  
 吐...  
 古...  
 文...  
 地...



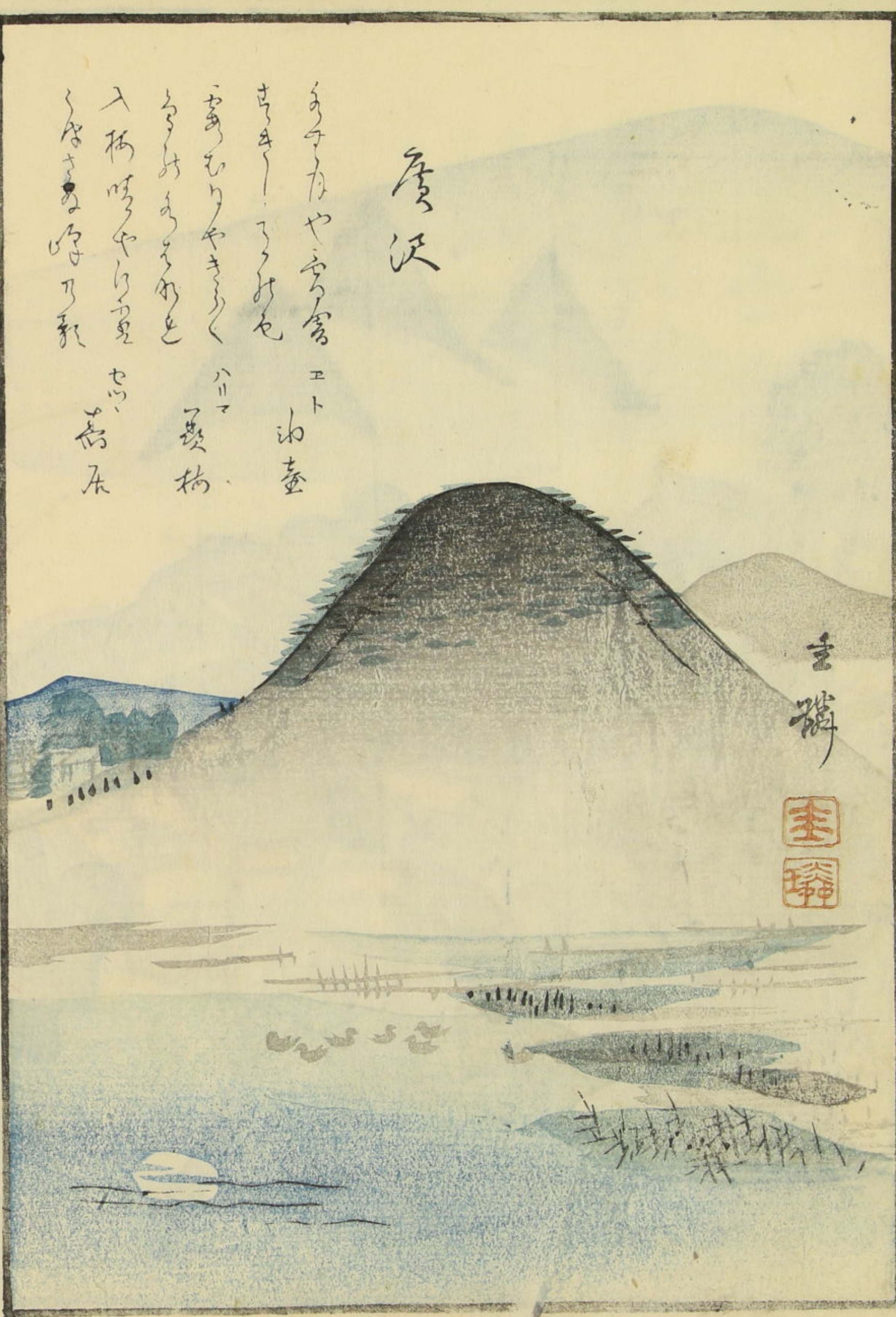
圓山應生





五たねのまをなつてラリ  
 あまやのまをなつてラリ  
 さみまのまをなつてラリ  
 又のまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ  
 日長のまをなつてラリ  
 池のまをなつてラリ  
 多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ  
 多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ  
 多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ

丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳  
 丹暮  
 柳



多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ  
 多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ  
 多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ  
 多のまをなつてラリ  
 きのまをなつてラリ  
 清のまをなつてラリ  
 大のまをなつてラリ

高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高  
 高

吉  
 璣  
  


東

晴く白く雲 霧のきく 林のうら 桑色  
 降くぬ 晴くうら 長水月 其 梅 旭  
 ありあけまきまき ぬく あけの け 子  
 けくうらあけあけ けけ ぬきけり けい 雲 晴  
 けけのきく 赤きあけのきくうらわさき けけ  
 け

今よあるはくくくくくくくくくくくく ね 甜  
 ぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬく 木 葉  
 舞く舞く舞く舞く舞く舞く舞く舞く舞く 木 長  
 赤くくくくくくくくくくくくくくくくく 錦 止  
 係 松 やりのきくくくくくくくくくくく 有 牙



夕掛り 右 左 千々 夕  
 夕きぬきぬ 夕 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕

夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕  
 夕きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ 夕



雲仙



松菴  
印

清河

晴々として清き河に  
 舟を乗せしるは  
 清き水に映るる  
 舟の影は  
 清き水に映るる  
 舟の影は  
 清き水に映るる  
 舟の影は

舟を乗せしるは  
 清き水に映るる  
 舟の影は  
 清き水に映るる  
 舟の影は  
 清き水に映るる  
 舟の影は  
 清き水に映るる  
 舟の影は

山嶺俄為  
 書畫場  
 紫新是筆  
 勢相張  
 千尋門  
 可通天影  
 一片舟  
 難蔽燈光  
 或想月宮  
 寒變熱  
 又疑星漢  
 水如湯  
 坐觀未倦  
 蹤皆滅  
 大字明二  
 左右長  
 能登長尾魁題



義章  
 詔  
 宰

めづる嶽

清々々々々々 山々々々々々  
 小き〜〜 大文字 太斗丸  
 き〜〜あ〜〜の〜〜も、 万丈  
 ち〜〜り大〜〜ん〜  
 大のちのちと〜〜り〜、 一漆  
 や〜〜れ置〜〜る〜  
 凹た〜〜山も〜〜い、 佳妻  
 乃あ〜〜と〜〜り

大文字乃あやき〜〜り〜月のみ、 莖子  
 吹〜〜ち〜〜あ〜〜り〜誘ひぬ大〜〜ん〜、 矢印  
 ち〜〜ち〜〜や〜〜れ〜〜を〜〜中〜〜海〜〜に〜〜流〜〜す〜〜や、 橋  
 有〜〜れ〜〜や〜〜角〜〜み〜〜た〜〜れ〜〜た〜〜る〜〜や〜〜并〜〜み〜〜る〜〜尾〜〜全  
 坂〜〜々〜々〜山乃〜〜氣〜〜さ〜〜る〜〜清〜〜み〜〜れ〜〜た〜〜六〜〜新〜〜重  
 清涼の〜〜あ〜〜ら〜〜り〜〜ら〜〜ら〜〜大文字 鳥岬



鳥岬

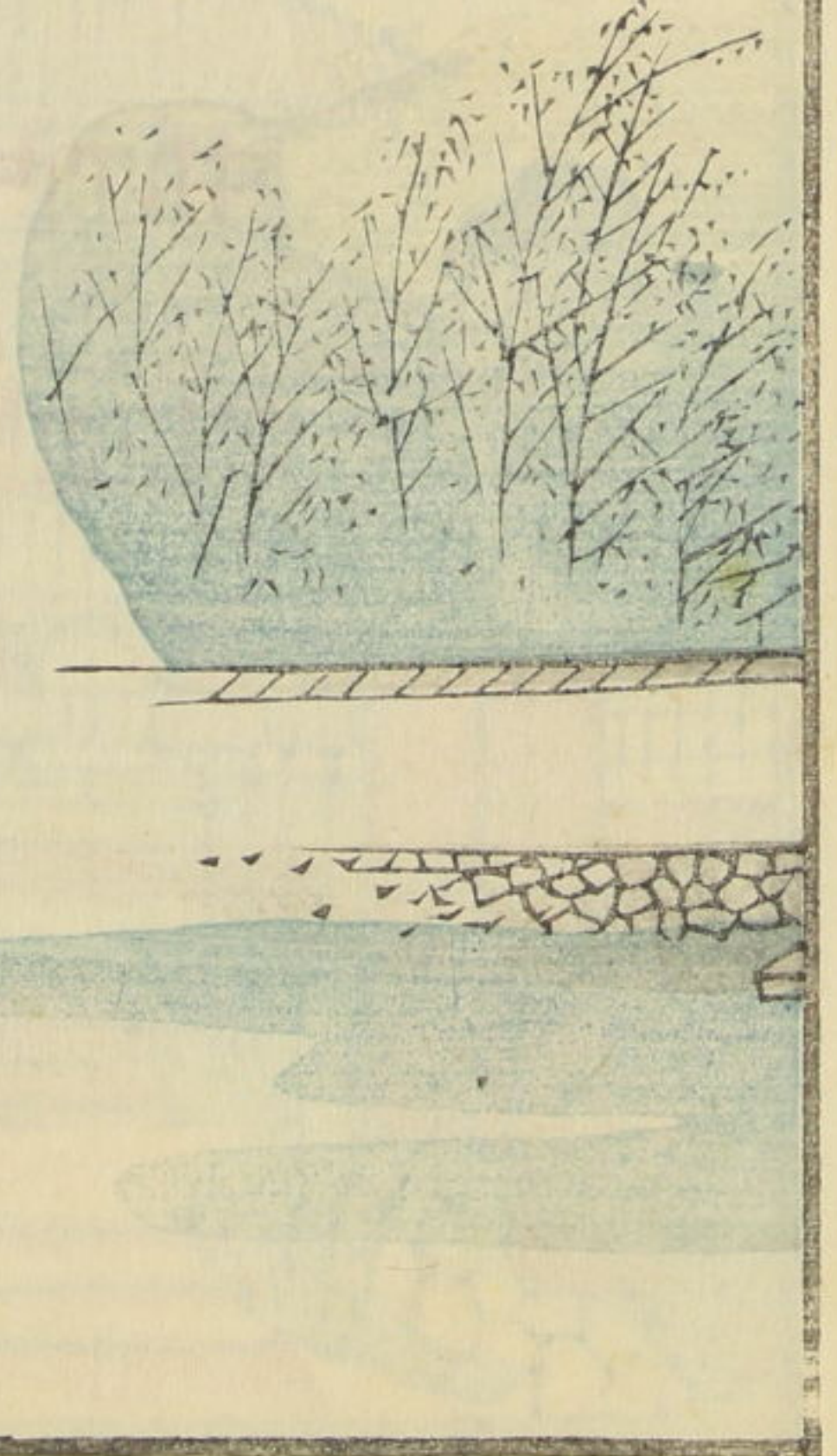
大鳳



青梁山

ナク新月霞や柔き春の木枝の影  
 山初を新花の中 舞うぬ柔枝の子 狂  
 柔の柔やあふんもふより花香る 玉  
 山の山をささぐ 花を 水を 古 梅 牛  
 ナク新月霞や柔き春の木枝の影

柳の柔き影も返ぬ 静かなる 青 松 子  
 依る 舟 子 志 一 舟 子 志 一 舟 子 志  
 舟 子 志 一 舟 子 志 一 舟 子 志 一  
 舟 子 志 一 舟 子 志 一 舟 子 志 一  
 舟 子 志 一 舟 子 志 一 舟 子 志 一  
 舟 子 志 一 舟 子 志 一 舟 子 志 一





霞彩  
豊彩

一六四

おきりも又日暮るべし  
おきりも又日暮るべし  
おきりも又日暮るべし  
おきりも又日暮るべし  
おきりも又日暮るべし

ハ坂

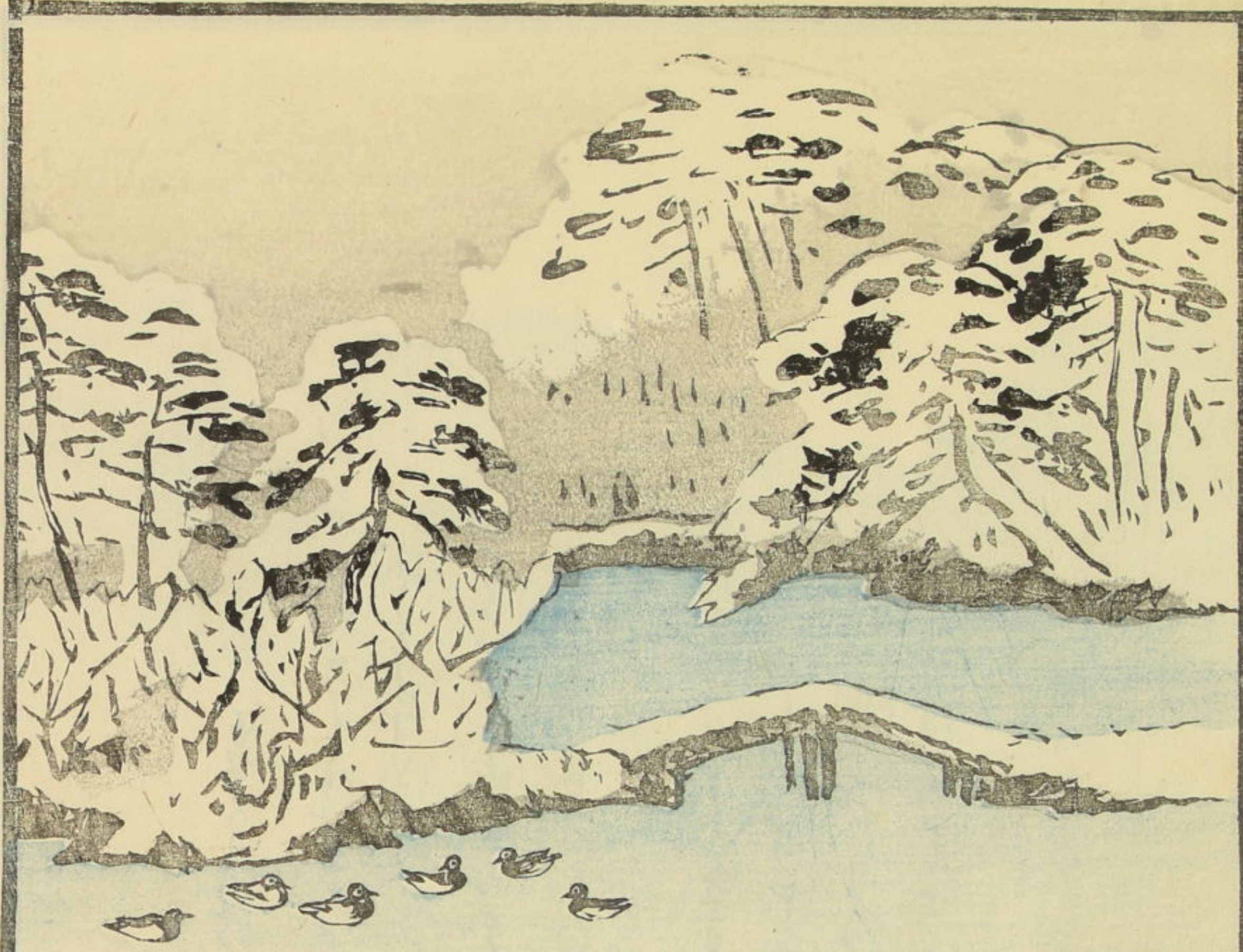
夕色の中  
夕色の中  
夕色の中  
夕色の中  
夕色の中

二一

二二二







万仙  


産安寺

平路の川流す十二  
 陵のやむ可き  
 二月廿四日  
 うつりあふふふ  
 くらふふふふ  
 きんふふふふ  
 ふふふふふふ  
 若ふ行ふふ

二 塚  
 山 切  
 可 希  
 乐 五

産安寺

晴ぬ月を照らす  
 後をけりては  
 穂花のふも  
 不日岩の  
 そは

照らす月を  
 穂花のふも  
 不日岩の  
 そは

指あふ  
 切  
 出  
 高  
 高 谷

中  
 中  
 中  
 中  
 中  
 中  
 中  
 中



五

三

黄  
文  
園

靈山

三十一  
 出  
 松  
 池

松  
 池  
 文  
 園

五

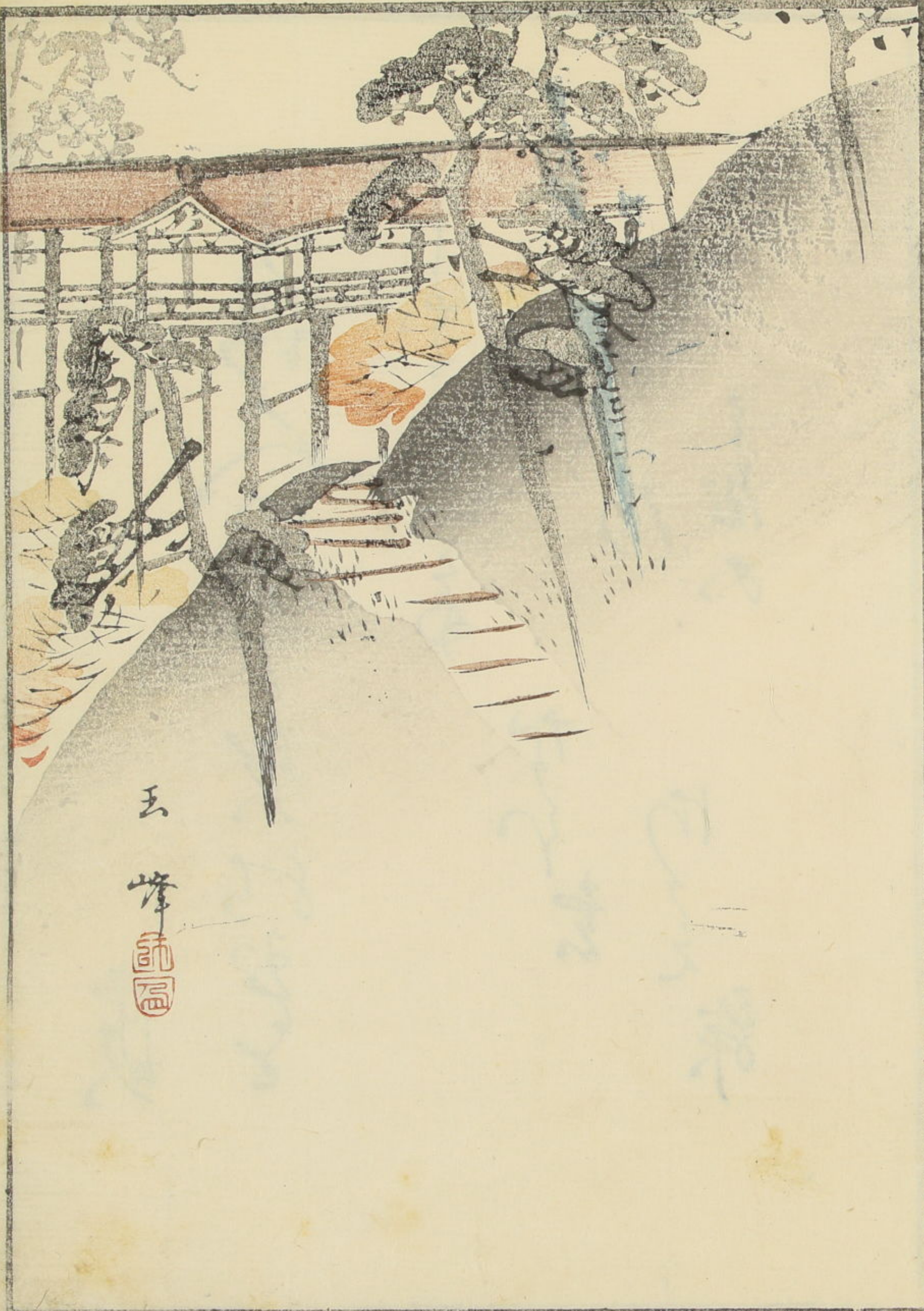
上



通了橋

然吟々一木一石採小多桑う班 トP 号裁  
 以て未と多々採まふ合もろくも いり 甚美直  
 かゝ干流るあまふおちや 丹石 丹石  
 嚙くく い のはきし い の石を い 女  
 之んち い の石を い の石を い の石を い の石を  
 持て い の石を い の石を い の石を い の石を

山の中をさうして 左 あり 右 あり 左 あり 右 あり  
 又 い の石を い の石を い の石を い の石を  
 又 い の石を い の石を い の石を い の石を  
 又 い の石を い の石を い の石を い の石を  
 又 い の石を い の石を い の石を い の石を



玉  
 峰  


秋

三  
路  
人  
の  
心  
を  
察  
す  
と

一  
は  
一  
の  
心

心  
の  
心

心  
の  
心

心  
の  
心

心  
の  
心

心  
の  
心



